
マイケル・クック北海道セミナー

安藤正人

1

ブリティッシュ・カウンシルが主催する「国際アーキビスト・セミナー」というのが、2、3年に一度、英国リバプール市で開かれる。リーダーはリバプール大学の大学アーキビス

トで同大学のアーキビスト養成課程主任講師でもあるマイケル・クックさん。記録史料学研究とアーキビスト教育の国際的な指導者の一人として知られている。

「国際アーキビスト・セミナー」は、世界

中から集まった20人ほどのアーキビストが2週間同じホテルに泊まり込んで徹底的に勉強するという、なかなかハードなセミナーだが、選りすぐりの講師陣と密度の濃い講義内容、それに何にもましてクックさんの温厚な人柄のせいで、毎回かなりの人気を集めているらしい。日本からも1989年に国会図書館の松村光希子さん、1992年に北海道立文書館の青山英幸さんが参加している。いずれも本誌『記録と史料』に報告を書いて下さっている(第1号、第4号)ので、ご記憶の方も多かろう。

リバプールのような2週間のセミナーは無理だけど、せめて3日間くらいでいいから、クックさんを日本に招いて同じような泊まり込みのワークショップをやりたい——。1992年のリバプール・セミナーに参加してすっかりクック・ファンになった青山英幸さんが、そう考えてブリティッシュ・カウンシルに助成金を申請したのは去年の春。幸いブリティッシュ・カウンシルだけでなく、福武学術文化振興財団からも援助を受けられることになって、本当にクックさんの招聘が実現してしまった。

クックさんは、マーガレット夫人とともにエール・フランス機で今年3月28日に来日。2週間滞在して春爛漫の日本を東奔西走し、北海道立文書館から山口県文書館まであちこちの文書館を見て歩かれた。その間をぬって、東京での公開講演1回と北海道での2泊3日のセミナーをお願いした。前者については、

本号「研究」欄に講演内容をそっくり掲載してあるので、ここではもっぱら北海道セミナーについて記したい(なおクックさんの略歴や業績については、本誌50頁に掲載されているのでご覧いただきたい)。

2

北海道セミナーは、やや大げさだが「記録史料学国際研究セミナー」と銘打ち、テーマを“記録史料情報の標準化と電子化—ISAD(G)制定によせて—”とした。ISAD(G)というのは国際文書館評議会(ICA)の記述標準特別委員会が1994年に発表したGeneral International Standard Archival Description(国際標準記録史料記述:一般原則)のことで、『記録と史料』第6号(1995年9月)に全文の日本語訳と短い解説が載っている。要するに、記録史料の情報交換を促進するため、目録記述の国際的な標準化を図ろうという試みで、図書館界のISBD(International Standard Bibliographic Description、国際標準書誌記述)にならったものである。クックさんは上記ICA特別委員会の委員として、ISAD(G)の作成に中心的な役割を果たした。そこで、この機会にクックさんから直接ISAD(G)について話してもらい、記録史料情報の標準化と電子化をめぐる国際的動向を学ぼう——これが本テーマの趣旨であった。ただ、それだけでは少しもったいないので、我々の側からも日本における記録史料目録の歴史と現状について研究報告を行い、国際的な標準化と情報

化の動きに日本としてどう対応していくべきか、クックさんの意見を聞きながら議論しようということになった。

参考までに、福武学術文化振興財団に提出した報告書には、本セミナーの目的を次のように書いた。

「記録史料(アーカイブズ)の目録情報の整備と電算化は、歴史学をはじめとする学問研究の発展に不可欠であり、図書館における電算化と同様にその効果が期待され



ている。本研究セミナーは、その推進のために基本となる記録史料目録の編成と記述について、記録史料学（アーカイバル・サイエンス）の観点から学理的・技術的研究を行うことを目的とした。具体的には、第一にICA（国際文書館評議会）が最近作成した『ISAD(G)（国際標準記録史料記述：一般原則）』および同じくICAが現在検討中の『ISAAR(CPF)（記録史料オーソリティー・レコード国際標準規則：団体・個人・家文書版）』について検討すること、第二に日本国内で行われているいくつかの目録標準化と電算化の試行について検討すること、第三に『ISAD(G)』および『ISAAR(CPF)』に対応した日本の記録史料目録記述基準を作成するための課題の明確化とその解決方法の検討を行うこと、の三点を目的とした。」

このようにテーマがかなり専門的なため、1995年10月、1996年1月、同年3月の3回、有志に呼びかけて準備研究会をもった。ここでは、欧米各国における記録史料目録記述標準化の歴史と現状、ISAD(G)の内容と特徴、マイケル・クックさんの最近の著作（特に*Information management and archival data*, Library Association Publishing, London, 1993）などを勉強するとともに、日本における記録史料目録の歴史と現状について、中世文書、近世文書、近現代文書に分けて検討を行った。

3

このような準備を経て、1996年3月29日から31日までの2泊3日、北海道苫小牧市のホテルニドムで本番のセミナーが開催された。

ホテルニドムは広大な林の中に北欧風のコテージが20棟ほど配置されたリゾートホテル。この時期はまだ雪が深く、クック夫妻は、厚いコートにマフラー、防寒帽姿で木立の間の遊歩道を歩きながら、「まるでチェーホフの世界だ」などと洩らしていた。

さて、セミナー参加者はクック夫妻を除いて18人。北海道から沖縄まで全国から集まったが、今回は準備研究会に参加したメンバー

のみによるクローズド・セミナーの形をとった。3日間のプログラムは以下の通り（ただし、クックさんが来日直後で疲労が取れていなかったため、一部の講義を後回しにするなどの変更があった）。

第1日（平成8年3月29日）

- 15:00-16:00 開会、オリエンテーション
- 16:00-17:00 自己紹介等
- 18:30-20:00 オープニング・ディナー

第2日（3月30日）

- 9:00-12:00 講義1（マイケル・クック）
International Archival Description
Standards: ISAD(G)
国際記録史料記述標準: ISAD(G)について
- 12:00-13:30 昼食
- 13:00-15:00 講義2（マイケル・クック）
International Archival Description
Standards II: Authority Control
国際記録史料記述標準II: オーソリ
ィ・コントロールについて
- 15:00-15:30 休憩
- 15:30-17:00 講義3（マイケル・クック）
Descriptive Standards: MAD2,
RAD, APPM 記録史料記述標準:
MAD2, RAD, APPMについて

第3日（3月31日）

- 9:00-10:00 研究報告1（水野 保）
Catalogue Description in Japan
日本における史料目録記述
- 10:00-10:30 休憩
- 10:30-11:30 研究報告2（田中 康雄）
A Database on Early Modern Arc
hives 近世文書目録のデータベース化
- 11:30-13:00 昼食
- 13:00-14:00 研究報告3（吉田 千絵）
Archival Description Model on
Archives of KAITAKUSHI according
to ISAD(G) 開拓使文書のISAD(G)に
よる目録記述モデル
- 14:00-15:00 まとめの討論
- 15:00 閉会

クックさんの講義はOHPを使って懇切丁寧に行われた。ここで内容を詳しく紹介することはできないけれども、その一端を述べると次のようなものであった。

講義1では「国際記録史料記述標準：ISAD(G)について」と題してISAD(G)の目的と特徴を中心に話された。ISAD(G)では、記録史料群を構造的にとらえるために、フォンド/サブ・フォンド/シリーズ/ファイル/アイテムという5レベルの階層モデルを設定し、各レベルの記述にあたっては6つのエリアに分かれた、全部で26のデータ要素(記述項目)を使用するように求めている。もちろん、どの記録史料群も必ず上記の5階層で把握し26項目全部を記述しなければならないということではない。個々の記録史料群のサイズや性格に応じて階層数は伸縮自在にやればいいのだし(たとえばシリーズ・レベルの下にサブ・シリーズ・レベルを増設するなど)、26のデータ要素も不要な部分は省略することができる。ISAD(G)は、あくまで「一般的」な標準であり、凝り固まった規則ではないというところがポイントであるように思われた。この講義は『記録と史料』第6号にISAD(G)の日本語訳が掲載されていることもあり、比較的よく理解できた。

講義2は、ICA記述標準特別委員会がISAD(G)の次に作成しつつあるISAAR(CPF)についての話であった。ISAAR(CPF)は、International Standard Archival Authority Record for Corporate Bodies, Persons and Familiesの略である。「記録史料オーソリティー・レコード国際標準規則：団体・個人・家文書版」とでも訳せようか。

図書館学では、書誌記述の際、標目となる著者名や件名の表記法が館や人によってバラバラにならないように「典拠ファイル(オーソリティー・ファイル)」というものを作って標準化を図っている。そのことを「典拠コントロール(オーソリティー・コントロール)」という。

ISAARが意図している記録史料記述のオー

ソリティー・コントロールは、半分は図書館の典拠コントロールとまったく同じで、記録史料(群)の出所名など、標目となる用語の統一化を意味している。たとえば「M.Ando文書」や「Ando Masahito文書」は「Masahito Ando文書」に統一しよう、といったようなことである。しかし、あと半分は図書館学にない、記録史料(アーカイブズ)独特の試みであるらしい。私自身100%理解しているわけではなく、うまく言い表せないのだが、要するに、標目用語だけでなく、標目となる“記録史料(群)の出所”に関する情報(provenance information、たとえば、Masahito Ando文書ならMasahito Andoの生没年、履歴など)の記述まで統一化してしまおう、ということのようである。いずれにせよISAARというオーソリティー・コントロールは、図書館の典拠コントロールとはかなり中身が違うので、「典拠」という訳語を使うのが適切かどうか大いにためらわれるところである。

講義3は、イギリスのMAD2、カナダのRAD、アメリカのAPPMという、それぞれの国で使用されている記録史料目録記述マニュアルについて説明するものであったが、時間の都合でほとんど話が聞けなかった。ただこの三つは英語圏に限られるとはいえ、文書館界で実用化されているスタンダードであるし、ISAD(G)作成の参考にもされたということなので、今後きちんと学ぶ必要がある。ちなみにMAD2はManual of Archival Description 2nd edition、RADはRule for Archival Description、APPMはArchives, Personal Papers and Manuscriptsの略で、MAD2はマイケル・クックさんを中心とするリバプール大学記録史料記述プロジェクトの作品である。

以上の講義のほか、休み時間には、持参のノートパソコンで、イギリスの文書館で使われている記録史料目録情報システムをデモンストレーションしてくれた。イギリスではARCHWAYという記録史料目録用データベース・ソフトが地方の文書館などに普及しつつあったのだが、開発した会社が倒産したとか

で、他のシステムに乗り換えざるをえない状況なのだとか。

次に、日本側からの報告の概要をごく簡単に記すと次の通り。

東京都公文書館の水野保さんは、残念ながらセミナーに参加できなかった京都府立総合資料館の渡辺佳子さんとの共同研究の成果として、北海道立文書館をはじめとするいくつかの文書館の文書目録を取りあげ、目録の構造とその変遷を分析した。その結果、日本の文書館の目録の場合も記録史料群の階層構造に対する認識は早くからあったが、目録本文ではなく「解題」のなかで記述されてきた点に特徴があること、また、組織の歴史や記録史料群の階層構造に関する記述が「研究紀要」などに掲載されていることもあるので、それらを全体として評価する必要があることなどを指摘した。こういう“目録論”研究はおそらく初めてであり、貴重な試みだと思う。

群馬県立文書館の田中康雄さんは、市販ソフト「桐」を使った近世文書目録のデータベース化の試みについて紹介した。「桐」を目録作成に使っている人は随分多いと思うが、田中さんの場合はISAD(G)などで強調されている記録史料群の階層構造の把握と表示が近世文書の場合データベース上でどう可能か、実験結果と見通しを示した点が重要だったと感じた。

北海道立文書館の吉田千絵さんは道立文書館のチームを代表し、同館所蔵の北海道開拓使文書の目録記述をISAD(G)を使ってやったらどうなるか、という大変興味深い実験結果を紹介した。報告によれば、どのように記述すればいいのかわからない項目もあったけれど、おおむねうまくいったとのことである。クックさんからは、必ずしも全部の項目を記述する必要はない、というようなアドバイスがあった。

クックさんらICA記述標準委員会が世界のアーキビストに期待しているのは、吉田さんたちのように実際にISAD(G)を使って各国の記録史料群の目録記述テストを行うことであり、

それを通じてISAD(G)の問題点を明らかにしていくことである。そういう意味で、この報告はクックさんにとって有意義だったろうが、黒板に英語と日本語混じりで開拓使文書群の構造図などを描きながら、ああでもないこうでもない議論したこの時間は、私にとっても実に楽しいものであった。

4

そろそろ、まとめに入らなければならない。北海道セミナーの成果はいろいろあったと思う。第一に、クックさんからISAD(G)およびISAAR(CPF)について直接説明を受け討議を行う機会を得たことにより、両規則を中心とする記録史料目録標準化の国際的な動きについての理解が一段と高まったことが最大の成果としてあげられよう。第二に、日本国内における記録史料目録記述および目録情報電算化の変遷とその問題点について、ほとんど初めてといえる本格的な検討が行われ、これに対してクックさんから有益な意見を得たことも大きな成果のひとつであった。第三に、ISAD(G)およびISAAR(CPF)に対応した日本の記録史料目録記述基準の作成の課題については、もちろん一朝一夕にどうなるものではないが、北海道開拓使文書の目録記述試行例が報告されるなど、具体的な検討も行われ、それを通じて今後の課題もかなり明確になってきた。

以上のような点から、今回のセミナーは、日本の文書館における記録史料の目録記述標準化および電算化にとって、大きな意味を持つセミナーであったと思う。

当面の宿題は、できるだけ早く報告書を出版して、セミナーの成果を広く共有できるようにすることである。何とか実現したい。

なお、クックさんのお話によれば、今年9月に北京で開催されるICA国際大会において、各国のアーキビストからISAAR(CPF)についての意見を聞く機会を設ける予定らしい。できれば私たちとしても、何らかの意見を提出したいと思う。

あんど う まさひと・国立史料館